

編集後記

より高い完成度を目指して投稿論文を査読をさせていただいて感ずることの中に、著者間で対応の格差が大きいことがあげられる。その背景は多種多様なものが存在しているように、いずれにせよ論文のために時間と努力をどれほど費やされているのか、著者間あるいは施設間の日頃の考え方の差に大きく左右されているものと思われる。何ごとも許してしまおうとする昨今の日本の世相がここにも反映されてきているのだろうか。「教育」や「人的交流」などを重要視していたとしても、十分な時間をそこへ配られぬ忙しさが指導者を襲い過ぎていることも主因のひとつとしてあげられよう。さて、このような実態は将来に何をもたらすことになるのであろうか。

昨今の英文論文では、国内外を問わず多数の著者の羅列が目立ち、症例報告のそれにおいてさえもその傾向は強い。著者数が多いことについては、論文の完成度へそれぞれの共著者が如何に貢献したのかについての判断に時代的変遷を生じていることがあるように思われる。国内からの論文のそれには、日本の「心の美德」と「和」を大切にす精神が強く関わっていることもあるように推察される。日本人の礼知にかなった行為・判断については欧米からも評価されているだけに、その姿勢を大切にしてもらいたいとの気持ちはある。一方で、すべての著者が論文のためにどれほど努力したのかを評価しあうことは重要であろう。施設内だけでは指導不足と感じた時は、慣れた環境に属する指導者に依頼することもよい。努力した結果として仕上がった論文をあらためてながめてみると、その結果として、日常臨床での交流とは異なる新たな相互関係の形成をあらためて認識することとなろう。

大学改革の名のもとで教育改革が進んでいる。教育者数不足に対し、大学院生をティーチングアシスタントとして学生教育を担当させるなど、教示に参加する人の構築を階段方式としての教育体制で構築しようとの考え方が実際に試行されている。確かに教育することは“二度学ぶこと”と言われているように、体得できるものは大きい。正しい形で定着することを望みたい。老若を問わず自ら学び、相互に高揚しようとする人の多い集団であればあるほど、相互に切磋琢磨する姿勢が生じ、その結果、より成熟した組織となって進むはずである。日本消化器外科学会雑誌の編集委員の一人として、そのような基礎造りのために一層の貢献をさせていただきたいと思っているところである。

(平田 公一)